

★コラム バイオリージョナリズム

糸長浩司

1. 米国のバイオリージョナリズム運動

米国のピーター・バーグらが提唱している地域づくりの考え方が「バイオリージョナリズム」(BIOREGIONALISM)と表記され、日本語訳では生命地域主義、生物地域主義という訳となり、流域単位での地域環境づくりの運動として米国西部での運動が行政境を越えて展開されている。米国等での地域的環境運動の一つとして、流域での行政的な枠組みを越えて、人間を含めた生物・生命が共存・共生しているつながりのつよい環境形成を目指して、一体的な環境づくりの政策決定や計画づくりを流域全体で行っていかうとする考え方である。

この運動の原点となっているバイオリージョン(BIOREGION)とは、人間の都合による地域の境界線でなく、自然の特徴により一つのまとまりを持つ地域と認められるものである。動物相、植物相、地形、土壌、そしてこれら自然の特徴に根ざした人間社会や文化の特質などが、バイオリージョンを決める手がかりとなる。こうした要素で決定されるバイオリージョンは、一つの河川の流域、あるいは、いくつかの流域の集めたものと重なってくるのである。生命の根幹である水を基幹として成立する地域環境の範域を地域計画の基本的範域として捉える考え方である。特に、米国や豪州のような植民地的支配での州境や、市場の人為性に対して、自然の視点からの地域環境の位置づけである。そのときに河川を軸として位置づけることとなる。河川の上流から下流への運命的共同体的連関性の確立が求められている。

地域環境の計画単位としてのバイオリージョンの持つ意義には、以下のような意義を見いだすことが可能である。①自然生態系的連鎖、②社会・経済的連鎖、③歴史・文化的連鎖、④政治的連鎖である。政治的な仕切としての行政境を越えて、自然生態系を一つの骨格として位置づけて、地域環境の保全や活用の範域を決定し、その範域での計画的行為や事業的な行為を位置づけていかうとする考え方である。

我が国の場合は、行政区域の基本的単位として、江戸時代に確立された藩域が比較的流域性をもって構成されていることから、バイオリージョナリズム的な単位を想定しやすい。しかし、戦後の近代化は、陸上交通環境の整備による経済的振興を図ったために、流域的な生活圏のつながりは希薄化してきた。道路網の整備による流域を越えた生活圏、経済圏の拡大の中で、歴史的に形成されてきた「バイオリージョン」的な範域は希薄化してきた。しかし、気候、風土、伝統的な農山村文化の遺産は、まだ十分にこの流域の範囲の中で見てとれる。

2. 流域ネットワーク化による流域環境づくり

我が国の近代的な都市の発展は、下流域で進展してきたといえる。人口の移動も上流から下流に流れていった。そして、水不足に象徴されるように、下流の生命線としての価値を上流が持っていることが認識されてきている。また、下流の都市住民にとって上流の山河は、かれらのより近場の余暇活動の場としての意義をもつ。

横浜市の水源の森として道志村の森林を保全するような関係が出来てきている流域もある。また、全国的にも、下流と上流のつながりを重要視した取り組みが出始めている。気仙沼での漁師による上流部への森林育成活動等に代表されるような、下流の経済活動にとって、上流の森林の大切さが認識されてきている。

このような一本の水系を軸とした流域での上流と下流の交流のネットワーク化をより身近なものとするためには、余暇活動的な連携を上流と下流で進めていくことである。余暇活動やリゾート的な活動を介して、下流の民と上流の民が交流し、お互いを知り合うことで理解し合うことで、上流の環境の大切さが深まり、その環境を維持していくことが、下流の安定的な環境の維持にも繋がるという関係性を理解することになる。その発展形態として、上流の水源地域の保全のための信託的な経済的な支援策としてのトラスト的な取り組みも可能となっていく。

### 3. 森は海の恋人

川は地形によって、急激な流れ、緩やかな流れを形成しながら、最初は森林から出発した川も最後は海に注がれる。そして、その海で多くの生き物を育てる。水は太陽エネルギーで水蒸気となり、上昇気流として大気中を上昇し、大気中に雲の塊をつくり、雨水としてまた地上に落下し、森林や地中にしみ込み、地下水や表面水として河川に流出し、海へと流れていくという、地域レベル、地球レベルでのサイクルを形成している。川を流下していく過程で多くの生き物を育て、人間の暮らしを持続させてきた。川は、人間をはじめとした地球の生き物を育ててきた動脈であり、静脈といえる。

流域は水源林となる森の空間（川上の環境）、河川沿いに形成された水田や都市の人間の暮らしの場や生き物の生息空間、河口や海岸線、海浜の空間（川下の環境）から構成される。河川を中心とした一定の広がりのある地域環境はつながりが密接であり、川上の環境が破壊されると川下の環境も大きな影響を及ぼされる。その意味では、一種の運命共同体的な関係を形成してきた。アジア・モンスーン地域での年間を通しての水量の多さと水量変動の差は、川の総合的な視点からの水の利用や管理が進められてきた。また、水運の発展にみられるような重要な輸送の空間として位置づけられ、社会、経済活動もこの水系を軸として形成されてきた歴史もある。ただ、近代の道路網の発達はこの流域的な地域環境の連結性、緊密性を無視したために、流域的な環境形成をどう再構築するかは大きな現代の課題となっている。

日本の都市形成の歴史は川上や河川の氾濫原で多く形成されてきたので、川を巡る災害も多く発生し、近年の大規模な河川災害に対して、土木工学的な治水技術だけの対応では根本的な問題解決には至らないことに気づきつつあり、改めて川を中心とした流域での地域計画、地域環境づくりの必要性が認識され始めている。また、一方で、上流域での大規模なダムや堰による水系を人工的にカットすることによる流域生態系の破壊や、それに伴う中流・下流域、海浜の生態系環境の変質が問題となってきている。「ダムはムダ」の論議も起きてきており、流域全体での総合的な治水・利水・親水、保全と活用の総合的な視点が必要となっている。川上の保水力のある、健全な森の育成や農林地の管理、利用が安心した川を育み、安心して快適な川下の暮らしの場を形成してくれることに気づきつつある。

「多自然型河川工法」といわれる河川の整備方法や、開放型の堤防である伝統的な治水工法の「霞提」という、洪水時の増水と流速を巧みに押さえる工法の再評価、遊水池の設置、河畔林等の河川沿いのビオトープ空間（自然の生き物が生息できる空間）等の整備手法が採用されてきている。西欧での流域環境づくりは、蛇行する河川流路の復活・修正、あるいは、人工的な氾濫地域の形成とそのための社会経済的保証政策等の総合的な流域環境保全と活用手法が展開されてきているのが実状である。

自然環境と調和し、人間のための利水・治水・親水のための河川環境整備のための基本的な考え方は、より自然な状況での河川環境を維持しながら、人間の暮らしに必要な水をどう確保し、それを利用した後にどう再び、河川に返していくのかという河川を中心として、小領域での水の利用と排出の循環的な利用システムを確立していくことが求められている。同時に、流域に暮らす上下流の流域人達の合意形成の上に、自然環境と共生した治水・利水・親水の整備手法を決定していく社会的な仕組みづくりも必要である。

この川上と川下の運命共同体的な意味を表した言葉が、この”森は海の恋人”というキャッチフレーズであり、東北の気仙沼のカキの養殖業者がカキの収量不足の原因として、上流の森の荒廃に気づいて、健全な森づくり、森林の育成のための支援活動を始めてきた。日本全国でこの種の流域ネットワークの市民活動が始まってきている。川の水を介した新たな共同体づくりである。

#### 4. バイオリージョン・エコノミーの形成

経済のグローバリゼーション化は益々進んでいく可能性があるなかで、もう一度地域経済のあり方を模索する時期にきている。金やサービスの流れが、全てグローバリゼーションの中に投げ込まれる必然性はない。安定した暮らしを地域で築いていくためには、改めて地域経済の確立、地域での循環型経済の確立を模索する必要があるだろう。農産物の産直、農産物の上流と下流の交換の経済は、健全な地域経済を形成するものとなる。そのような地域経済の新しい樹立が必要となってきた。

流域的な地域環境資源、特に上流部の地域環境資源の保全や活用に関わる費用負担や労力提供に関して、下流と上流との交換のルートとルール化のシステムの確立である。その点に関する試みとしては、森林トラスト的仕組み、農地トラスト的な仕組みがあろう。また、「東京の木で家をつくる会」のような、住宅産業と林業との連携による森林環境の保全と更新に関するネットワーク的取り組みも出てきている。

デカップリング的所得保障の実現に際しても、保証する空間がどこにあるのかが目に見えて分かることが大切である。下流の人達はその上流に向かって確実にその環境を維持しているという意識を確立していくためには、下流から上流へのでカップリング的保証がよい。バイオリージョン的保証である。その延長線上にバイオリージョンでの地域経済の構築ができないか。

その参考となるのに、近年、「地域通貨」を活用した地域経済の進展の方向が日本でも試みられている。その一つに、筆者が研究している「LETS」(Local Exchange Trading System)がある。地域外の市場経済に影響されないで、地域での物やサービスの交換を行うことで、地域外での市場経済に影響を受けることなく、安定的で自立型の地域経済と地域での新たな雇用の機会を創出し、地域のコミュニティを形成していこうとするものである。バイオリージョンでの物と人の交流がスムーズにするための経済的な仕掛である。